

横穴式石室平面形態の検討 補稿

丸川 義広

1. はじめに

1989年11月に刊行成った『大枝山古墳群』（京都市埋蔵文化財調査報告第8冊）の付章において、筆者は当時京都市内と乙訓地域で知られていた横穴式石室93基を集成し、その平面形態、規模、尺度、企画性、時期的変遷、地域の動向などの諸点を整理した⁽¹⁾（以下、「旧稿」とする）。そして小文の最後に、当時としては取り上げられなかった古墳3基を補注のかたちで示し、その資料的位置付けについて追記した。旧稿を提示してから早や10年近くが経過した。この間に、京都市内と乙訓地域では横穴式石室をもつ古墳の調査が、先の3基を含めて13基に達した。また、旧稿で取り上げなかったものの中にも、石室の形態が判別できる例があることも知った。これとは別に、宇治市においても横穴式石室をもつ古墳が調査されている。旧稿で触れなかったこれら資料は、北山背における横穴式石室の実態を考える上で欠くことのできない資料である。そこで、本稿では対象とする地域を宇治川右岸の宇治市北半域まで広げ、この範囲で得られた横穴式石室の紹介を行なう。そして、横穴式石室の規模・形態の特徴を旧稿同様の立場から再検討する。旧稿に資料的な肉付けを行ない、その改訂を計ろうとするのが本稿の立場である。

2. 追加古墳の紹介

旧稿以後に調査された古墳で、横穴式石室のデータが得られた古墳は13基ある（常盤御池古墳・福西(22)号墳・福西28号墳・下西代1号墳・下西代2号墳・法華寺1号墳・灰方1号墳・灰

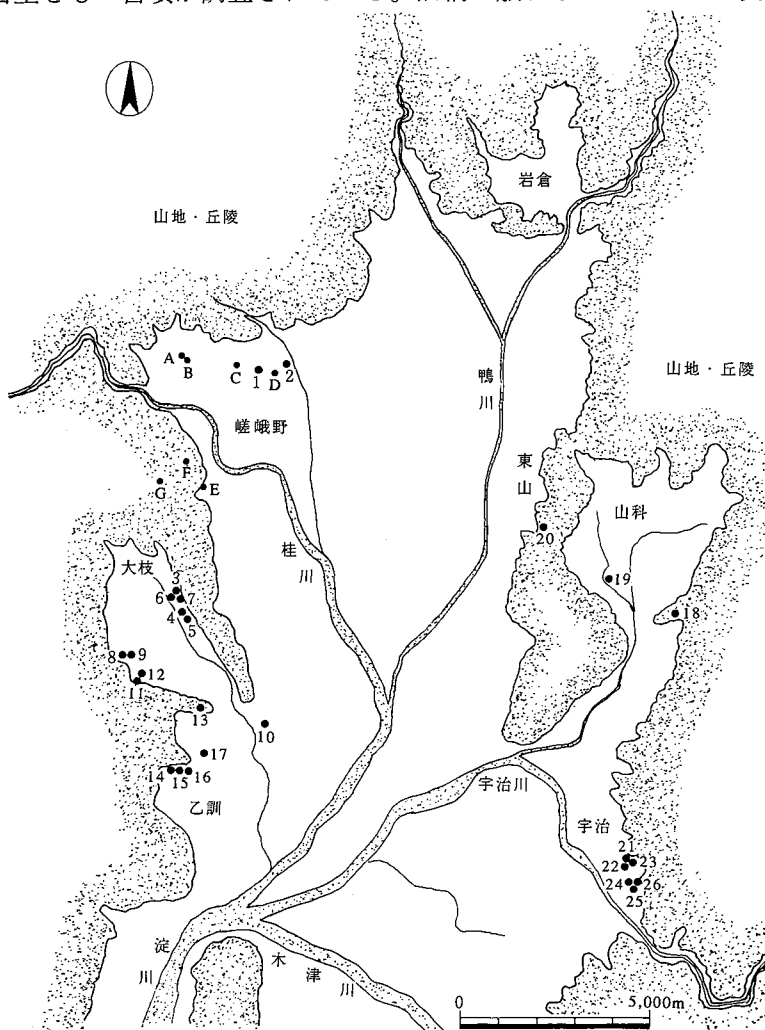


図1 関係位置図（図中の番号・記号は本文の記載順）

方4号墳・井ノ内稲荷塚古墳・走田8号墳・走田9号墳・走田10号墳・中臣70-2次古墳)。これには旧稿の補注で示した3基を含む。また旧稿では取り上げなかった既往資料が7例ある(巽1号墳・福西古墳・福西23号墳・福西24号墳・今里大塚古墳・醍醐1号墳第1石室・総山古墳)。加えて、宇治市側で調査された古墳が6基ある(隼上り1号墳・隼上り2号墳・隼上り3号墳・菟道1号墳・菟道2号墳・菟道3号墳)。以上、合計26基について、まずその概要を記す。次に、石室内内容がある程度判明するものを参考古墳として掲示する。

① 新出資料・既往資料

1 巽1号墳(11=表2の番号、右京区山越巽町) 1986年に調査された古墳であるが、石室の平面形態が明瞭でないため旧稿では除外した。しかし嵯峨野の平野部に築造された大型円墳の主体部を知る上で重要な古墳と考え掲載した。石材は大型のものが使用される。玄室長4.6mに復元されるが、奥壁位置が明確でない点に問題を残す。羨道の一部に敷石が残る⁽²⁾。

2 常盤御池古墳(12、右京区常盤御池町) 1989年1月～3月にかけて調査された古墳で、旧稿の補注で示したうちの1基である⁽³⁾。基底石の抜取穴と敷石の範囲から規模・形態が判明した。玄室は左片袖(奥壁からみて)で細長い形態をもつ。玄室長4.7m、幅1.8mに復元され、この数値は天塚古墳南石室に等しい。羨道は基底石が残存し、中央には石蓋をもつ排水溝が付設される。出土須恵器は6世紀前半～中頃に属し、横穴式石室導入期の古墳である。嵯峨野における横穴式石室の普及を知る上で重要な位置を占める。

3 福西古墳(57、西京区大枝東長町) 1957年に調査され、「大枝福西古墳」として報告された古墳である⁽⁴⁾。組合式家形石棺を埋納し、それを取り囲むような石室をもつ。現存長さ3.2m、幅1.2mあるが、奥壁や開口部の構造は明らかでない。終末期古墳に多くみられる石棺を直葬する構造のようにもみられるが、北山背では例がないだけに貴重である。

4 福西23号墳・5 福西24号墳(58・59、西京区大枝福西町) 洛西ニュータウン建設に伴う福西古墳群の調査において、最終段階で調査された古墳である⁽⁵⁾。旧稿では筆者の登録もれであった。ただし、石室形態は今一つ判然としない。23号墳の石室は敷石をもち、規模からすると無袖石室か、あるいは有袖石室の羨道部分とみてよいが、24号墳の石室は開口部の石材を元位置とみると小石室の形状を呈することになる。23・24号墳はともに石室規模が小さく、上記福西古墳の存在も考慮すると、古墳群の築造は終末期に及んだことは確実である。

6 福西(22)号墳(54、西京区大枝福西町) 1990年冬にマンション建設にともない調査された古墳である⁽⁶⁾。敷地の関係で羨道部のみが調査された。羨道は開口部が狭くなる形態をもつ。棺台石や敷石面も検出されている。出土須恵器は7世紀初頭から7世紀後半までのものがあり、追葬あるいは石室の再利用を考える上で貴重な資料となった。

7 福西28号墳(55、西京区大枝東長町) 1992年9月に上記(22号墳)に近接して石室が見つかり調査された⁽⁷⁾。石室は右片袖とみられ、玄室長約3m、幅1.2mに復元されるが、袖石は未検出である。建物地下に保存されるため、石室内の掘り下げは行なわれなかったが、玄室部分で敷石が検出されているので、平面形はほぼ現状で正しいと思われる。

8 下西代1号墳・9 下西代2号墳 (61・60、西京区大原野南春日町) 圃場整備に伴う調査で水田下から発見された古墳群である。1989年6月～8月に1号墳が⁽⁸⁾、1990年7月から10月に2号墳が調査された⁽⁹⁾。1号墳石室の存在は旧稿の補注で示した。玄室長3.0m、幅1.5mあり、大枝山古墳群の報告書において設定したB類石室に近似する⁽¹⁰⁾。2号墳の玄室はこれより細長い形態をもち、内部に小石室様の石組が付設されており注目を集めた。この石組は玄室奥壁を共有するかたちで構築されており、石棺として使用されたとみてよい。乙訓地方は石棺の流行地域であるが、なぜこのような特異な石棺が付設されたのか興味もたれる。

10 法華寺1号墳 (67、向日市上植野西小路) 1997年9月に長岡京朱雀大路の下層において検出された古墳である⁽¹¹⁾。墳丘は削平されていたが、周溝が方形にめぐることの方墳と判断された。石室は基底石数個が残存する。全長2.2m、幅0.5mときわめて小型である。閉塞石の形跡がないため小石室とはいえないが、規模的には小石室と同等といえるものである。開口部の狭い範囲に敷石が残る。石室外に土師器甕が置かれていた。終末期古墳としては乙訓で初の検出例となったが、副葬品が乏しい点で所属時期に問題を残す。

11 灰方1号墳・12 灰方4号墳 (64・65、西京区大原野灰方町) 1996年5月に道路の拡幅工事に際して古墳2基が調査された⁽¹²⁾。1号墳の石室は奥壁から約1.5m分、4号墳の石室は羨道部約4.5mが調査された。石室幅はともに1.1mを測るため、両方とも無袖石室とみられる。1号墳は敷石をもち、4号墳では石蓋をもつ排水溝が付設されていた。1号墳からは須恵質陶棺、4号墳からも土師質陶棺が出土している。排水溝を付設し陶棺を納めた古墳は、乙訓地域に多くみられる。

13 井ノ内稲荷塚古墳 (68、長岡京市井ノ内) 全長45mの前方後円墳で、乙訓地域の一首長墓でもある。後円部に築かれた横穴式石室は、1994・95・96年夏に大阪大学考古学研究室によって調査された。石室内部は1996年に調査され、構造が明らかとなった⁽¹³⁾。それによると、玄室は右片袖で物集女車塚古墳の石室に類似するが、規模はそれより一回り小さく、大型の石材で構築される点でも差異がある。内部に組合式木棺の痕跡が良好に残され、埋葬形態を知る好例となった。

14 走田8号墳・15 走田9号墳・16 走田10号墳 (74・72・73、長岡京市奥海印寺走田) 走田8・9号墳は、寂光院背後の山裾で造成工事が行なわれた際に発見され、1995年11月から1996年1月にかけて調査された⁽¹⁴⁾。9号墳の石室は両袖で玄室長3.2m、幅1.8mあり、下西代1号墳の石室よりやや大型である。玄室には敷石が施され、中央には家形石棺の底石が遺存する。その下には排水溝が付設されていた。8号墳の石室は石材がほとんど抜かれていたが、幅約1mに復元でき、無袖石室であったと推定できる。この2基は、墳丘・石室規模の大きい9号墳が先に造られ、次いで8号墳が近接して造られたと思われる。8・9号墳間では須恵質陶棺が出土した。これは9号墳に使用されたものが石室外に廃棄されたと考えられる。

走田10号墳は、両古墳の東70m地点で1997年12月から翌年1月にかけて調査された古墳である⁽¹⁵⁾。石材は大半が抜き取られていたが、抜取穴から規模・形態が推定できた。玄室奥部には敷石が部分的に残され、玄室中央には排水溝がある。9号墳と8号墳の中間的な規模をもつが、排水溝を

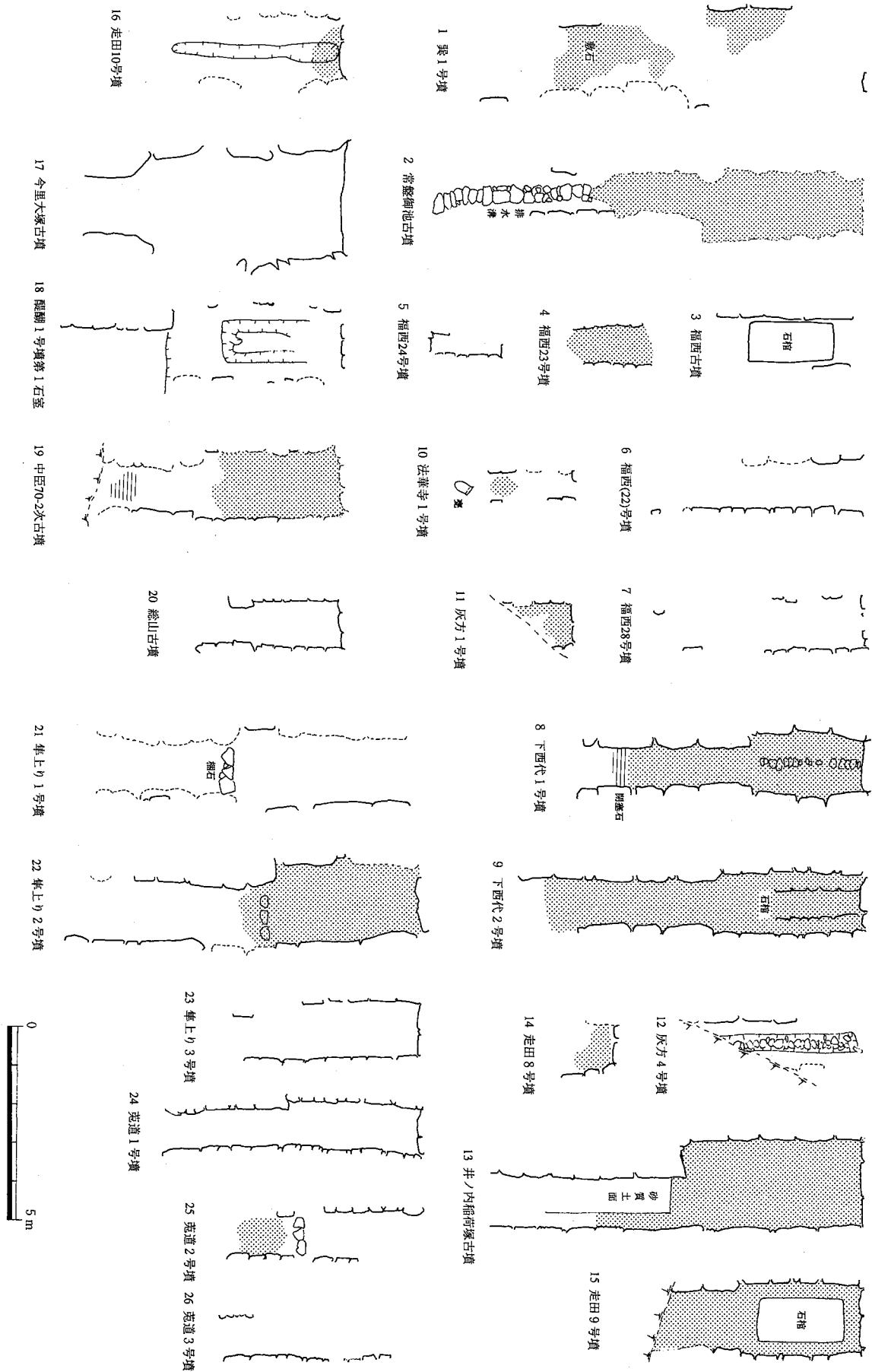


图2 横穴式石室平面图集成 (1 : 150)

もつことから両袖石室であったと推定される。

17 今里大塚古墳（75、長岡京今里天神5丁目） 旧稿作成時には石室実測図が公表されていなかったが、1990年に刊行された『長岡京市史』資料編⁽¹⁶⁾に石室実測図が掲載されたため、今回取り上げることとした。石室の下半は埋没状態にあるため、石室の正確な規模・形状は明らかでないが、玄室長は現状で5mあり、下半がはさらに2m程埋没していると考えられるので、本来はもっと大型であったことになる。奥壁で2段、側壁も3段まで露出する。使用された石材はいずれも巨石で、嵯峨野に築かれた蛇塚古墳、双ヶ岡1号墳の石材に比べて遜色がない。もちろん乙訓最大の横穴式石室でもある。

18 醍醐1号墳第1石室（77、伏見区醍醐内ヶ井戸町） 醍醐1号墳は「耳塚」の俗称をもち、古墳群中の盟主的な位置を占める。主体部の横穴式石室は1986年6月に調査されていたが⁽¹⁷⁾、平面形態が不明瞭であったことから除外した。しかし中規模古墳の主体部を知る上で重要と考え、今回は取り上げることとした。玄室は基底石が数個残存する。羨道の東壁は保存が良いが、西壁は破壊されている。袖石は残存しないが抜取穴の配置から両袖と考えてよい。西の袖石の出が大きい。玄室長3.7mに復元される。この規模は嵯峨野の平野部に築かれた大型円墳の石室に匹敵する。玄室・羨道の床面には段差があり、玄室側が一段深く掘り込まれていることが注意される。

19 中臣70-2次古墳（109、山科区西野山中臣町） 中臣十三塚古墳群を構成する1基で、1989年2月から5月にかけて道路付設工事に伴い調査された⁽¹⁸⁾。この石室も旧稿補注で示した。石室は基底石とその上1段目が残存する。東壁の基底石は残存するが、西壁は抜取穴から推定した。西壁の奥壁から3.5m付近に袖石を想定し右片袖とみる。玄室内には敷石が敷かれる。群集墳としては通有の規模をもつが、副葬品に馬具を保持する点は被葬者を考える上で参考になる。

20 総山古墳（113、東山区今熊野総山町） 1975年から1986年に実施された京都考古学研究会の分布調査によって、開口状態であった横穴式石室が実測されている。古墳の概要は近く刊行される報告書に譲るとして⁽¹⁹⁾、石室は全長3.8m、玄室長2.2m、幅1.2mを有する小型の両袖石室である。袖石の出が少なく、時期的には新しい形態を有するが、石室高は1.8mあり、残存状態は良好であったようである。東山地域では横穴式石室の形態がほとんど知られていないだけに、本古墳の存在は貴重である。

21 隼上り1号墳・22 隼上り2号墳・23 隼上り3号墳（114・115・116、宇治市菟道西隼上り） 京滋バイパスの建設工事に伴い、1985年に2号墳・3号墳が、翌年に1号墳が調査された⁽²⁰⁾。1号墳の石室は3基の中では最も大きい。石室は東壁基底石がわずかに残存するのみで、袖石は抜取穴から推定された。玄室長4.5m、幅は1.6～2.0mで細長い形態をもつ。玄門部分に据えられた3石は框石とみられる。2号墳の石室は右片袖で玄室長3.65m、幅は1.6～1.9mまでである。東壁は曲線状を呈する。玄室には敷石を施す。玄門に框石が3石据えられる。玄室幅は奥が狭く玄門で広がる。これと框石の設置は、1・2号墳に共通する特徴である。3号墳の石室は右片袖で玄室長3.1m、幅1.4mある。3基の中で最も小型であり、基底石も直線的に並べられる。玄室は胴張りが無い。右の袖石は抜取穴からの推定である。

24 菟道1号墳・25 菟道2号墳・26 菟道3号墳 (117・118・119、宇治市菟道)

1995・96年に実施された菟道遺跡の調査で、横穴式石室をもつ古墳が3基調査された⁽²¹⁾。1号墳の石室は右片袖で玄室長3.3m、幅1.2mと細長く、袖石の出も少ない。石室主軸は北で東に湾曲する。石室主軸の湾曲は隼上り2号墳にもみられる。2号墳の石室は奥壁が残存しないため玄室長は知り得ないが、幅が狭くなる箇所と框石の位置から1号墳と同規模の石室であったと推定できる。玄室側には棺台石がある。玄門に框石を配置するのは、隼上り1・2号墳に共通する。3号墳の石室はさらに残りが悪く、羨道とみられる箇所の東壁数mと西壁の一部が残存するのみであった。幅1.0mあり、1・2号墳と同じ規模の石室と推定される。

② その他、参考古墳

本稿では検討の対象に加えなかったが、この他にも石室の規模・形態が推定できる例がある。

A 円山古墳 (3、大覚寺1号墳、右京区嵯峨大覚寺) 1975年、府立高校建設に伴う大覚寺古墳群の発掘調査に際して墳丘の一部が調査された。報告では墳丘図に石室が示されている⁽²²⁾。それによれば、石室は幅広い玄室に長い羨道をもつ。また、玄室内には家形石棺が2基埋納されているという⁽²³⁾。山背の巨石積み横穴式石室の中では最古の段階に位置付けられるもので、古墳時代後期としては最大の前方後円墳である見瀬丸山古墳 (奈良県橿原市) の横穴式石室に類似するものとして注目される⁽²⁴⁾。

B 入道塚古墳 (5、大覚寺2号墳、右京区嵯峨大覚寺) 上と同じ経過で墳丘の一部が調査された。こちらも報告では墳丘図に小さく石室が示される。現状は、石材10個ほどが露出するが石室の平面形は不明である。巨石を用いて構築されており、規模の大きさを推定させる。

C 広沢南野3号墳 (右京区嵯峨広沢南野町) 遺跡地図などでは、石室全長8m、両袖で玄室長4m、幅2m、羨道幅1.2mと具体的な数値が記載されている⁽²⁵⁾。しかし根拠となった出典は記載がない。近年の立会調査で、古墳の周溝らしきものが検出されている⁽²⁶⁾。

D 常盤馬塚古墳 (右京区常盤馬塚町) 遺跡地図には、石室全長7m、玄室幅2mの記載がある。しかし根拠は明らかでなく、現状では確認できない⁽²⁷⁾。

E 西芳寺17・23・26号墳 (西京区松尾神ヶ谷) 『嵯峨野の古墳時代』⁽²⁸⁾によると、西芳寺17号墳・23号墳・26号墳で石室の寸法が記載されている。それによると、17号墳は両袖で玄室長4.0m、幅1.8m、高2.5m、羨道長1.4m、23号墳は無袖で全長5.5m、幅1.6m、高1.9m、26号墳も無袖で全長6.5m、幅1.25m、高1.55mあるとする。この古墳群は、狭い範囲に43基もの古墳が密集して築かれており、松尾地域の中では核となった古墳群とみられるので、石室内容については特に注目しておきたい。

F 松尾山古墳群 (西京区松尾谷松尾山町) 松尾神社背後の山頂・山腹に築かれた群集墳は、『京都市遺跡地図』(京都市文化市民局 1996年刊行)においてこの名称に一括された。筆者は、この古墳群の概要を『研究紀要』第4号で紹介したことがあり⁽²⁹⁾、横穴式石室の規模・形状がある程度判明するものをあげると、B-2号墳は全長4.7m以上で幅約1m、B-3号墳は幅1.25m、B-5号墳は全長4m以上で幅1.2m、D-2号墳は幅約1mある。いずれも使用石材が小さいことや石室幅

が狭い点で無袖石室とみられる。この他、L-1号墳は玄室長2 m以上、幅0.85m以上の右片袖石室であり、M-6号墳は玄室長3.2m以上、幅2 m以上の群中では大型の両袖石室であることが判明している。

G 西芳寺川古墳群（西京区松尾谷松尾山町） この古墳群も、先の『京都市遺跡地図』で名称が上記に改められた。概要は同じく拙稿で紹介している。新発見古墳のうち横穴式石室の規模が判明するのは、D号墳が全長2 m以上、幅1.5m、高さ1.8m以上、E-1号墳が全長2 m以上で幅1.45m、高さ1.6m以上の規模をもつ。使用された石材は小型で、いずれも無袖石室の可能性が高いが、松尾山古墳群の石室より石室幅が広い点に注意しておきたい。

3. 石室平面形態の検討

① 追加資料の位置付け

追加資料を墳丘との関係で整理しておくことにする。ここでは墳丘規模を以下の6段階に区分して解説する。

1 墳形が確実に前方後円墳であるのは井ノ内稲荷塚古墳である。全長43mを有し、前方部が発達した墳形を呈する。円山古墳と今里大塚古墳は、それぞれ直径50m、直径46mを有する円墳であるが、その規模は卓越する⁽³⁰⁾。以上3基の古墳は、墳形・規模からみて首長墓に位置付けられ、主体部の横穴式石室もこれに比例して大きい。

2 これに次ぐ規模の古墳として、巽1号墳、醍醐1号墳、隼上り2号墳がある。巽1号墳の墳丘規模は明らかでないが、主体部の横穴式石室は巨石を積み上げた構造をもち、直径30m程度の円墳であったと推定できる。醍醐1号墳は直径25mの円墳、隼上り2号墳は直径30mの円墳で、主体部の石室は大型の石材を用い構築される。

3 次に、隼上り2号墳（直径22m）、常盤御池古墳（直径20m）、下西代2号墳（推定径20m）、下西代1号墳（直径18m）などがある。群集墳としては規模の大きい古墳といえる。主体部の石室は玄室長4.7m～3.1mまでのものがあり、ばらつきが大きい。

4 墳丘がさらに小型のものとしては、菟道1号墳（直径13m）、走田9号墳（直径12m）、隼上り3号墳（直径12m）などがある。群集墳としてはやや小型の部類に属す。石室は玄室長3.3m～3.1mの規模となる。中臣70-2次古墳もここに属するとみられる。

5 福西古墳群の3基、灰方1・4号墳、走田8・10号墳など小型石室を有するものでは、墳丘はさらに小型であったと推定できる。ここに至って、有袖石室よりも無袖石室が多く築かれるようになる。石室の規模も著しく小型化する。

6 最後に位置づけられるのが法華寺1号墳である。ここでは墳形そのものが方墳となり、しかも一辺6 mと規模はさらに小型化する。京都市内ではこのような方墳で構成された終末期古墳群が3例（右京区音戸山古墳群、伏見区醍醐古墳群、山科区旭山古墳群）知られており、小型で無袖の横穴式石室ないしは小石室を主体部とすることが判明している。

以上、今回取り上げた資料を墳丘規模から6段階に分けて考えた。こうした差異が形成された

要因としては、時期差と階層差という二側面からの検討が必要であるため、ここで若干の見通しを述べておこう。一般的にいて、石室の規模は墳丘の規模に比例する。このため、墳丘規模の大きな古墳では主体部の規模も大きい。ところが、横穴式石室が導入されるに際しては、まず首長墓など大型古墳の主体部に採用される。このため導入期の石室は総じて規模が大きい。時期が下ると、横穴式石室は普及を始める。古墳を築造する階層が拡大したためと解釈され、そうなるに石室自体は小型化する。古墳を築く階層と石室の規模には密接な関係があり、古墳数の増加が石室の小型化を促したと考えられるのである。古墳時代も終末期になると石室はさらに小型化し、ついには単次埋葬専用の小石室が出現する。ただし、こうした動きにあっても巨石を用いた横穴式石室は首長墓として築造が続けられる。古墳のもつ階層表現が残存するためである。以上、横穴式石室の規模の差を理解するには、時期的な変遷と階層的な構成という両面からの検討が必要なことを述べた。ここに紹介した追加資料からも、北山背における後期古墳変遷の一端を知ることができたわけである。

② 玄室長のまとまりと「グループ」認識

図3は、旧稿で作成した玄室規模比較図に13基を加えて作成し直したものである。玄室長ごとにまとまりがみられる点については、すでに旧稿で指摘したことであるが、今回の追加資料によって、まとまりはさらに明確になったと考える。以下では、それらのまとまりを「グループ」と認識することで、意味するところを検討しておきたい。

異1号墳(11=図3の番号)・井ノ内稲荷塚古墳(68)・常盤御池古墳(12)・隼上り1号墳(114)の石室は、玄室長4.7m前後の規模をもつ。これに旧稿で示した天塚古墳南石室(7)を加えると、この辺りに1つのまとまりが看取される。このまとまりの右上には大型古墳の石室が6基知られるが、まとまりは看取できない。したがって、玄室長4.7m付近のまとまりが石室の大き

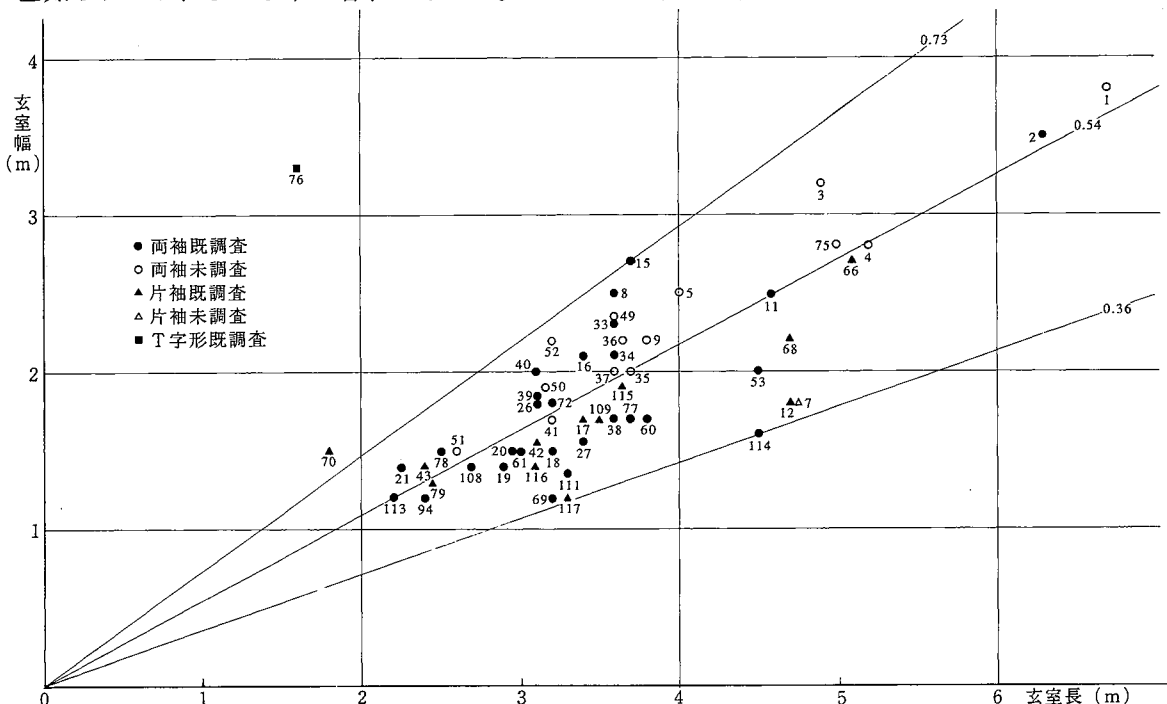


図3 玄室規模の比較 (番号は表2による)

な方からみた場合の最初のまとまりとみてよいだろう。この場合、井ノ内稲荷塚古墳と常盤御池古墳、それに天塚古墳南石室は導入期の横穴式石室であるという点で共通する。そこで、まずこの3基をもって「玄室長4.7mグループ」を考える。導入期の石室がこの付近に集中することは、これらが横穴式石室導入時の基準サイズであった可能性を示すものである。その場合、同じ導入期の古墳である物集女車塚古墳(66)を含む4基の石室はすべて片袖石室で共通しているが、乙訓に築かれた井ノ内稲荷塚古墳と物集女車塚古墳が右片袖であるのに対して、嵯峨野に築かれた常盤御池古墳と天塚古墳南石室は左片袖という違いがみられる。これが地域的な差異として指摘できることは、次節でやや少し詳しく述べるが、それにしても、横穴式石室導入時にすでに地域差が存在した点は注意すべきことである。

ところで、常盤御池古墳の石室と天塚古墳南石室は同じ規模をもち、同時期とみてよいものである。しかし、天塚古墳本来の主体部はさらに別の場所に求められるので、南石室は付属的な埋葬施設と考えるのがよい。⁽³¹⁾その付属施設と常盤御池古墳の主体部が同規模というのは、天塚古墳が全長73mの規模をもつ前方後円墳であるのに対して、常盤御池古墳が直径20mの円墳であることからすれば当然のことでもあるが、ここでは直径20m程の円墳に早くも横穴式石室が採用されていることが、嵯峨野における群集墳の展開にとっては重要であったと評価しておく。

次に、両袖である巽1号墳の石室は玄室長4.6mで復元されるが、この付近に両袖石室のドットはみられない。あえていうなら、玄室長4.5mを有する福西4号墳(53)と隼上り1号墳が近いわけであるが、この2基は幅が狭いという点で差異がある。巽1号墳の石室は、蛇塚古墳(1)・双ヶ岡1号墳(2)・甲塚古墳(4)・今里大塚古墳(75)という大型古墳の石室が並ぶ線上に位置し、それらと共通する企画で造られたとみられるので、この点からも巽1号墳・福西4号墳・隼上り1号墳の3基でグループを考えるには無理がある。

玄室長4m前後のまとまりも、今回の追加資料では明瞭にならなかった。⁽³²⁾

玄室長3.8m前後では、下西代2号墳(60)の石室が位置する。しかし幅が狭いために図の下方にドットされる。同じ玄室長3.8mのものとして、嵯峨野で狐塚古墳(大覚寺4号墳、9)が知られるが、こちらは巨石を用いた横穴式石室であり、下西代2号墳と同じまとまりで理解するには無理がある。

玄室長3.7mでは醍醐1号墳第1石室(77)と隼上り2号墳(115)の石室が追加された。ここから玄室長3.6mにかけて明確なグループがみられることは旧稿で指摘したとおりで、今回2基を加えたことで11基からなるグループの様子が明確になった。このまとまりを「玄室長3.6mグループ」と認識しておく。

ここでは、隼上り2号墳の石室を除くすべてが両袖石室である点が注目できる。ただし、このグループにおいても細部では一致しない部分が多い。中でも石室幅のばらつきが大きい。このグループの石室は、嵯峨野と桂川右岸の大枝を中心に乙訓、宇治に築造された群集墳の中核的な古墳の主体部に採用されている。そして、玄室長4.7mグループまでの間に明確なグループがないことから判断すると、このグループの石室が北山背の群集墳に採用された最初の企画性をもった石

室であったといつてよい。図2にみられるまともりは、それが各地域で築造されたことの結果を示すものであろう。

中臣70-2次古墳(109)は玄室長3.5mであるが、これに近接して御堂ヶ池21号墳(16)・御堂ヶ池17号墳(17)・音戸山4号墳(27)の3基が知られる。玄室長3.4m~3.5mで1つのグループが認識できるのかは微妙な問題である。しかし、玄室長3.6mグループの石室に比べ一回り小さく、築造時期も新しいため、この点を考慮すれば、1つのグループとして考えることも可能で、資料の増加が待たれるところである。

走田9号墳(72)・隼上り3号墳(116)はともに玄室長3.1~3.2mの位置にドットされる。この範囲にドットが集中することは旧稿で述べたことでもあるが、さらに2基の追加によって13基のまともりが認識できるようになった。これを「玄室長3.2mグループ」とする。このグループの石室は、先の3.6mグループに継続して築造されたことが調査の上からも確認されているので、次世代を構成するグループと考えてよい。そしてこのグループに属する古墳は、嵯峨野、大枝、大原野、乙訓南部から山科、宇治にかけて分布し、群集墳での最も一般的な横穴式石室となっている。このグループにおいても、石室幅はかなりの開きがある。それはこのグループの石室に胴張り形態が多く、計測位置によって数値が異なるためである。これに対し、玄室長3.6mグループでは玄室幅にばらつきはあるものの胴張りは少ない。こちらでは玄室幅の差をそのまま広さの差として扱うことができるのである。3.6mグループは3.1mグループより早く築かれたため、依然として石室の企画性が保たれていたものと考えられる。玄室の胴張りは、玄室空間を広げるための手段として普及したのであろう。

下西代1号墳(61)は玄室長3.0mに位置する。近接して御堂ヶ池6号墳(20)の石室があるが、この2基を玄室長3.2mグループに包括させて考えるには無理があろう。今後資料が増加すれば、1つのグループとして認識できる可能性があることを指摘しておく。

最後に、玄室長2.9mより2.2mまでの8基については、玄室長による明確なまともりは認められず、逆に玄室幅1.35~1.5m付近にドットが集中するという傾向がみられた。玄室幅にドットが集中する傾向は、以上みてきた石室には見られなかった現象である。この要因としては、有袖石室では玄室と羨道との間で差を生み出す必要があったこと、羨道幅は最小でも1m前後あるので、このために玄室幅が1.4m程度に落ち付いたと考えたい。

この付近に集中する古墳は、いずれも群集墳での最終段階で築造された古墳である。また、中には醍醐11号墳(78)や旭山E-2号墳(94)のように、無袖石室と小石室で構成される終末期古墳群での唯一の両袖石室が含まれている。この2基は、墳丘規模が大きい点でも古墳群中の中心的な古墳となっている。この時期の群集墳は、無袖石室が主体をなす。その中で築造された有袖石室は、階層的にみて無袖石室の上位に位置していたとみてよい。図3にドットされた古墳は、無袖石室に葬られた被葬者に比べ階層的に優位な被葬者の墳墓であったことを示している。

以上の事項を再度要約しておく。玄室長のまともりを「グループ」と認識した。そして、玄室長4.7mグループ、玄室長3.6mグループ、玄室長3.2mグループの3つを認識し、別に玄室長3.4m

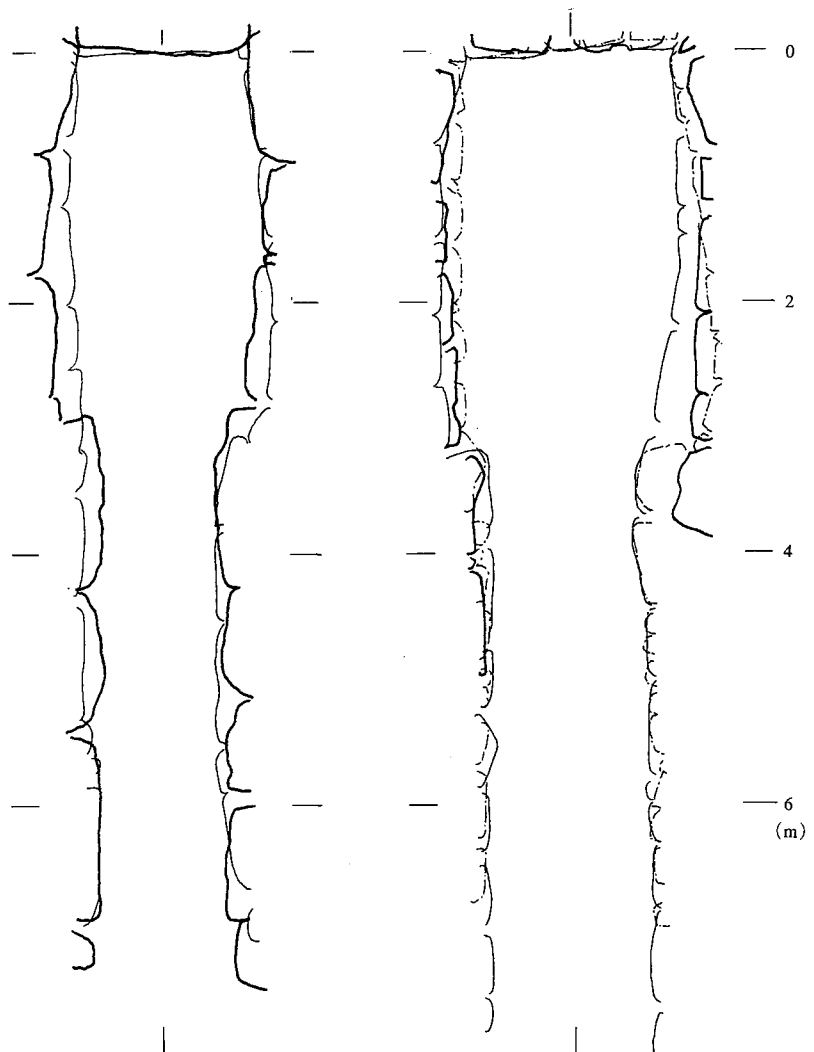
グループ、玄室長3.0mグループについては保留した。4.7mグループは3基からなり、すべて導入期の片袖石室であることから、導入時の基準サイズに沿った石室と考えた。3.6mグループは群集墳内での中核古墳の主体部を想定し、3.2mグループは3.6mグループに継続するものと考えた。つまり、北山背の横穴式石室は、4.7mグループに導入時の1サイズが示され、群集墳形成においては3.6mグループ、3.2mグループが継続して築造された。それより小型の石室にグループがみられないのは、終末段階の石室が企画性を喪失していたためであり、玄室幅にドットが集中するのは、羨道幅との相対的な関係が表われていると理解した。以上は、北山背における横穴式石室の導入、展開、終焉の諸段階を示すものでもあるため、再度要約した次第である。

③ 石室平面形からみた地域性

横穴式石室の平面形態に地域的な特徴が表われるのであろうか。筆者は以前、大枝山古墳群と福西古墳群を例に桂川右岸

地域の中で対比して考えたことがある⁽³⁴⁾。そして、幅広い玄室をもつ大枝山古墳群の石室は嵯峨野地域の石室に類似すること、玄室が細長く石棺が多用される福西古墳群は乙訓地域との関連が強いことを指摘し、それが葛野郡と乙訓郡の範囲に重なるという論旨を述べた。しかし、乙訓地域で下西代1号墳や走田9号墳が調査され、大枝山B類石室に類似する石室構造が判明したことで、この想定は再検討する必要が生じた。ここでは、追加資料を中心に石室細部の様子を検討しておこう。

下西代1号墳(図4左)玄室長3.0m、幅1.5mの規模をもつ。これに近似する規模の石室としては御堂ヶ6号墳の石室があるが、こ



下西代1号墳(乙訓) 走田9号墳(乙訓)
 大枝山14号墳(大枝) 音戸山1号墳(嵯峨野)
 大枝山23号墳(大枝)

図4 石室平面図の比較

こちらは玄室が胴張りをもち、左右の袖石も欠損するため正確な比較ができない。胴張りするという点で比較するならば、大枝山14号墳の石室が参考になるが、こちらは左片袖で、細部も一致しない。したがって、現状においては下西代1号墳の石室に類似する石室は見い出せず、この石室を大枝山古墳群のB類石室に含めるには無理がある。

走田9号墳(図4右) 玄室長3.2m、幅1.8mの規模をもつ。玄室長3.2グループで比較的類似する大枝山23号墳、音戸山1号墳との比較を示した。胴張りするという点では、3つの石室に共通性があり、袖石の位置もほぼ一致するが、走田9号墳の左袖石は出が少ない。これら3つの石室は、嵯峨野、大枝、乙訓南部で造られている。異なる地域で造られながら、玄室長が一致する点は注目される

が、細部においては一致しない点が多いことも確かである。それを知る具体例として提示する。

中臣70-2次古墳(図5左) 玄室長3.5m、幅1.7mの規模をもつ。図3では、御堂ヶ池17号墳、音戸山4号墳が近くにドットされるが、これらは左片袖で一致しない。むしろ両袖の御堂ヶ池21号墳と比較してみると、こちらの石室は幅がやや広いが袖石の位置、袖の出、羨道幅はよく一致する。中臣70-2次古墳では抜き穴での推定部分が多いが、ともに大

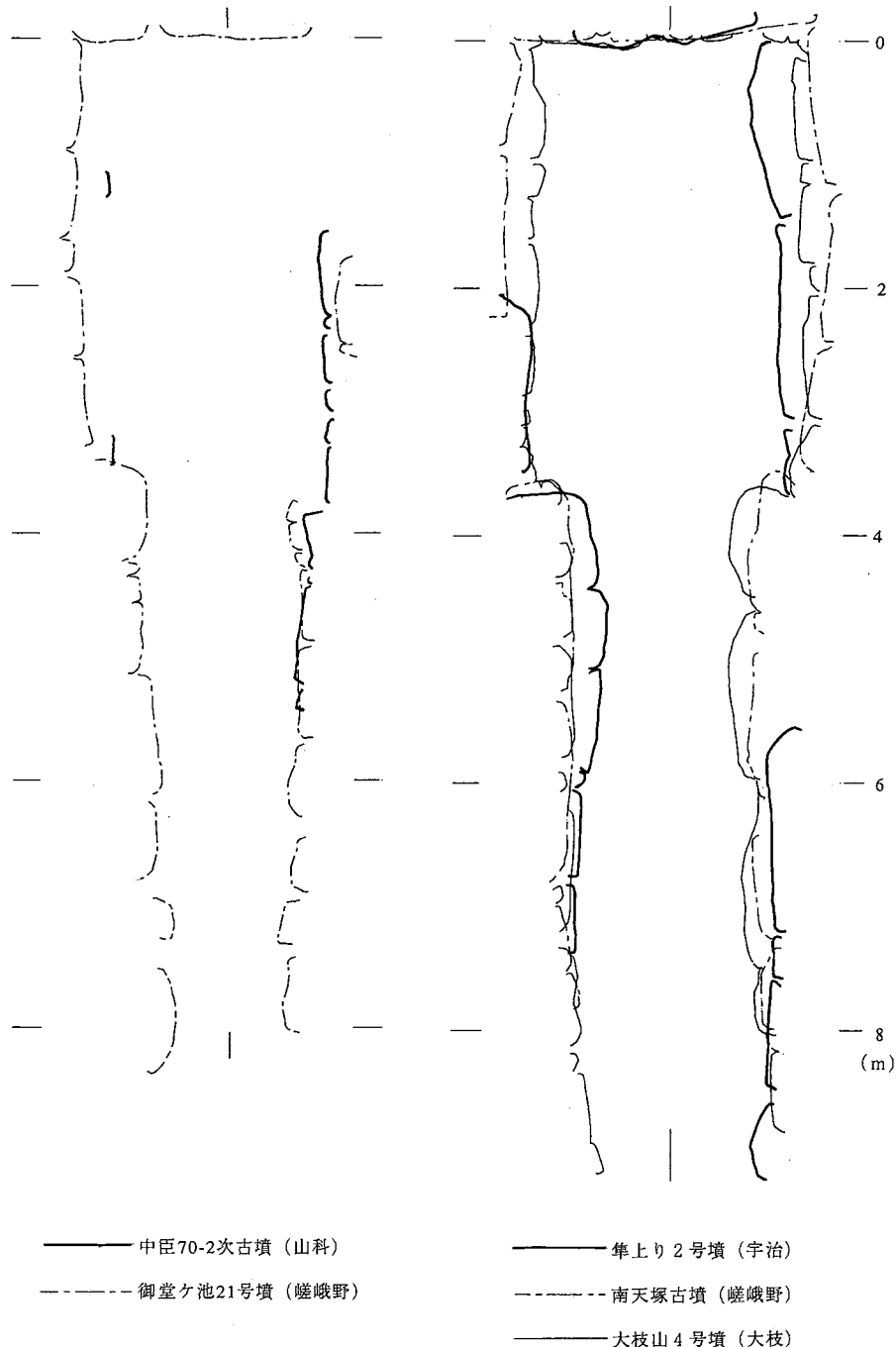


図5 石室平面図の比較

型の石材を用いて構築され、古墳群中では比較的大型の古墳の主体部である。

隼上り2号墳（図5右） 玄室長3.65m、幅1.9mの規模をもち、玄室長3.6mグループに属する。このグループの石室は嵯峨野と大枝に集中し、その他としては醍醐1号墳第1石室と本例が知られるのみである。醍醐1号墳の石室は残りが悪いため除外し他の石室と比べてみても、本例に類似する石室はみられない。それは、まず玄室長3.6mグループには片袖石室が本例以外知られていないこと、加えて本墳の石室主軸が湾曲しているためである。石室幅という点で比べるなら、大枝山15号墳の石室が比較的良好一致する。ただし、この石室も羨道幅は一致せず、また大枝山15号墳は未調査古墳であるため、石室基底の状態に問題点が残る。そこで巨石を用いた石室という意味で比較するなら、同じ大枝山4号墳の石室が参考になる。しかし、この石室の湾曲方向は隼上り2号墳とは逆となっている。仮に左右を反転させた平面図を重ねるなら、細部までよく一致するのであるが、実際に存在しない平面図で比較することは方法的に無理がある。本例も、玄室長が一致しながら細部は一致しない例として提示できる資料である。

以上、4基の追加資料と既往資料を用いて細部を検討してきた。結果を要約すると、玄室長を基にしたグループ内部では細部に不一致が認められ、とても共通の設計企画でこれらが築造されたとはいいがたいことが判明した。このことは、北山背に築造された横穴式石室は、規模の面では共通性があったとしても、実際の施行にあたっては強い制約が伴わなかったことを示すものと思われる。したがって、石室構築に際して設計企画なるものがあつたにしても、それは所属する古墳群内においては有効であっても、古墳群間ではその効果が看過できない程度のものであつたと思われるのである。

袖の方向 表1は表2から片袖石室を抽出したものである。片袖石室は15基あるが、袖の方向には明らかに地域ごとの差がみられるので、次にこの点を整理する。

左片袖の石室は6基あるが、うち4基が嵯峨野に築かれている。これに対して、右片袖の石室は乙訓・山科・宇治に築かれている。前節で玄室長4.7グループの存在を述べた際、導入期の片袖石室には袖石の方向に地域差があることを指摘した。それらを踏まえていうと、嵯峨野では常盤御池古墳と天塚古墳南石室にみられるように、伝統的に左片袖の石室が採用されてきた。対する乙訓では、物集女車塚古墳、井ノ内稻荷塚古墳で右片袖の石室が導入されており、その影響が他地域におよんだとみてよいだろう。右片袖が多
多い山科・宇治の地域は、乙訓の影響が大き
かったとする見方を示しておきたい。

位置的な関係という意味で注目されるのが大枝山古墳群の場合である。ここでは左片袖(14号墳)、右片袖(5号墳)の両方が築造されており、嵯峨野・乙訓の中間的な位置に立地することと無関係とは思われない。古墳群の立地と古代の交通路の関係を考えさせる1

表1 石室の袖方向（奥からみて）

番号	左	右
1	天塚古墳南石室（嵯峨野）	大枝山5号墳（大枝）
2	常盤御池古墳（嵯峨野）	物集女車塚古墳（乙訓）
3	御堂ヶ池17号墳（嵯峨野）	井ノ内稻荷塚古墳（乙訓）
4	音戸山4号墳（嵯峨野）	醍醐10号墳（山科）
5	大枝山14号墳（大枝）	中臣70-2次古墳（山科）
6	大原1号墳（乙訓）	隼上り2号墳（宇治）
7		隼上り3号墳（宇治）
8		菟道1号墳（宇治）
9		菟道2号墳（宇治）

つの視点となろう。

横穴式石室の排水溝 追加資料では、常盤御池古墳・下西代1号墳・灰方4号墳・走田9・10号墳の石室で排水溝が検出されている。以上4基の他に、物集女車塚古墳とカラネガ岳1号墳を加えた6基が、北山背で知られる排水溝をもつ石室である。その分布はいうまでもなく乙訓に多い。

では、なぜ乙訓の横穴式石室には排水溝が用いられたのか。この点に関しては、物集女車塚古墳の石室に丁寧な排水溝が付設されていたことに原因の1つがあると想定しておきたい。物集女車塚古墳は乙訓を代表する首長墓であるため、後世の石室構造に与える影響が大きかったと考えるのである。常盤御池古墳の石室にも排水溝は付設されていたが、後の古墳には続かなかった。古墳の規模の差が影響力の差を示しているのではなかろうか。

この他、乙訓地域では横穴式石室内に家形石棺や陶棺を埋納する例が多く知られる。下西代2号墳に築かれた小石室様の石棺も、石棺流行地域という中で位置付けると理解しやすい。このように、右片袖石室が多いこと、排水溝が付設されること、石棺や陶棺を埋納する例が多いことなどは、乙訓における横穴式石室のもつ地域色といえるだろう。

玄室の床面積 図7は、横穴式石室の地域差を考える上で参考になると考え、表2の数値をもとに玄室床面積を算出したものである。床面積を算出するにあたっては、奥壁のゆがみ、袖石の左右での差、玄室の胴張り幅などを確定した上でなされるべきであるが、ここでは表2の数値で掛算しただけであることを断わりおく。

床面積が最大のものは蛇塚古墳（1＝図7の番号）の25.5㎡であり、次いで双ヶ岡1号墳（2）の21.9㎡となる。円山古墳（3）、甲塚古墳（4）、今里大塚古墳（75）、物集女車塚古墳（66）の4基が15㎡～13㎡で接近する。9㎡代まで比較的散漫に推移するが、8㎡代から分布が急増する。8㎡代を有する石室は、玄室長3.6mグループに所属する。以下、3㎡代まで7基前後で平均的に分布する。玄室長との関係を見ると、3.6mグループは8㎡～6㎡に属し、3.2mグループは5㎡を中心に4㎡にも属している。

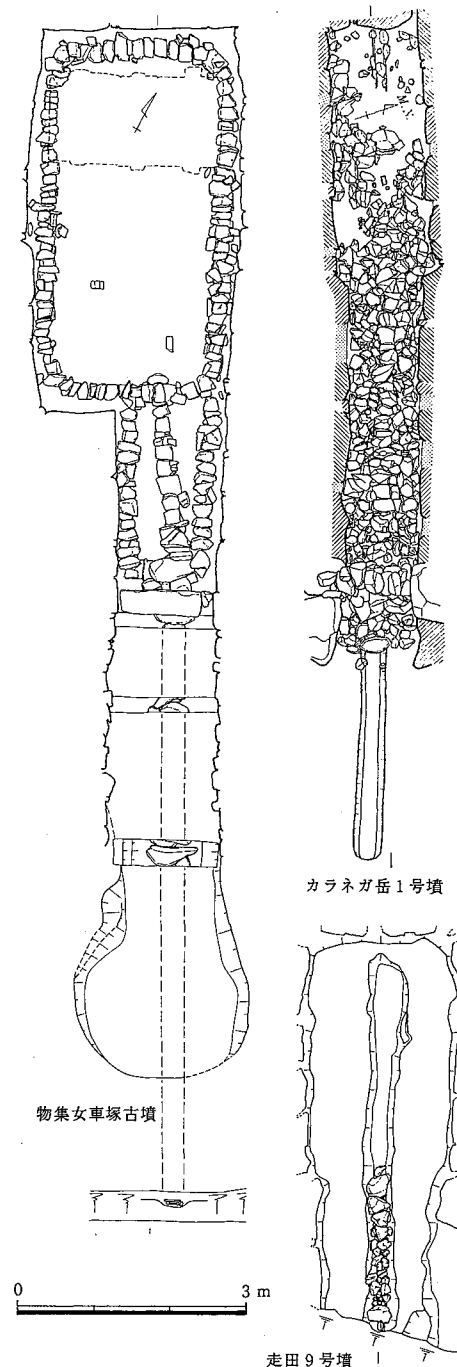


図6 横穴式石室の排水溝（表2の各文献による）

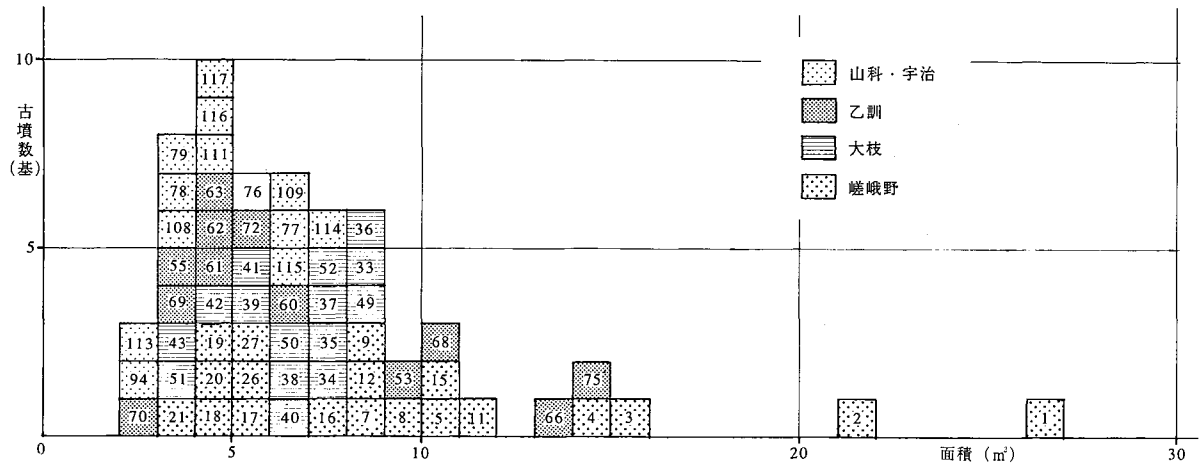


図7 有袖石室の玄室床面積 (番号は表2による)

次に、所属地域との関係を見る。9 m²以上の床面積をもつ石室は、嵯峨野を中心に乙訓が加わることかたちで構成される。これらの石室は、いずれも首長墓に比定される古墳の主体部であるが、嵯峨野の優位性は明白である。それ以下の規模に大枝山古墳群の石室などが加わる。山科、宇治に築かれた石室では、隼上り1号墳(114)が最大で7.2m²あり、以下6 m²代に隼上り2号墳(115)、醍醐1号墳第1石室(77)、中臣70-2次古墳(109)がある。しかし分布の中心は3 m²・2 m²代にあり、嵯峨野や乙訓に比べ狭いことは明らかである。このように、玄室床面積の分布からも嵯峨野、大枝からなる旧葛野郡に築かれた古墳の優位性は動かない。これに対して、山科、宇治の石室は床面積が狭く、また乙訓の石室は両者の中間的な位置を占めるといえる。以上は、旧葛野郡に築かれた古墳の規模がいかに大きかったかを示すもので、調査古墳の過多による影響を差し引いても、結論そのものが動くことはない⁽³⁵⁾と考える。

無袖石室の幅 玄室床面積の検討結果と関連させる意味で、無袖石室における石室幅の分布についてもみておきたい(図8)。これも表2の数値をもとにして求めたものである。石室幅が最大のもは、2.3mを有する広沢古墳の石室であるが、これを無袖とみるには疑問点もあるため図8では除外した。この結果、最大は天塚古墳北石室(6=図8の番号)の2.2mである。続いて常盤東ノ町2号墳(13)・1号墳(14)が1.7m、1.5mで大きい。以上の4基は例外的に大きいといってもよい。一般的には1.4mから1.1mと0.8mから0.7mに分布の集中する箇所がある。前者は御

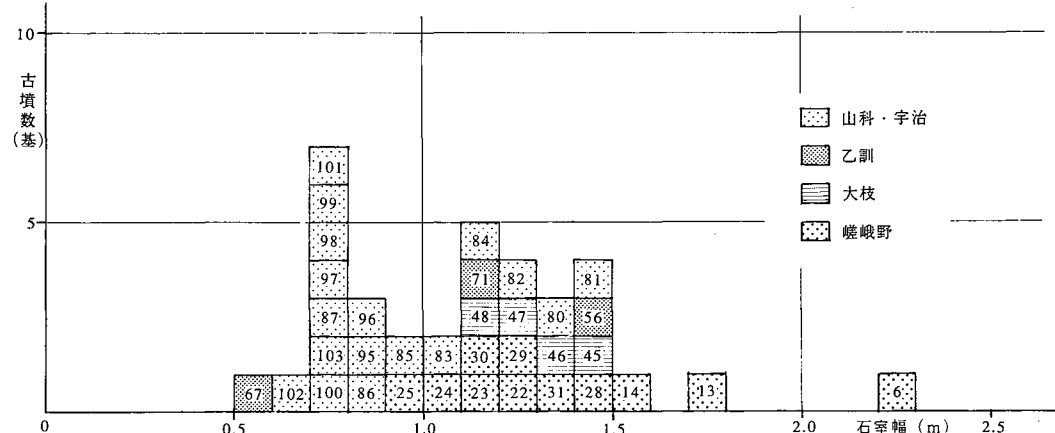


図8 無袖石室の幅 (番号は表2による)

堂ヶ池古墳群、音戸山古墳群、北松尾古墳群など、嵯峨野から大枝に築かれた古墳群で構成され、後者は醍醐古墳群、旭山古墳群という山科盆地に築かれた終末期古墳群で構成される。以上のように、無袖石室の石室幅においても、より広いものは嵯峨野から大枝にかけて築かれ、狭いものは山科盆地に築かれたことが明確となる。これは、前者が古く後者がより新しいという時期差を表わすものでもある。この点と、先の玄室床面積の分布を含めていうなら、旧葛野郡では比較的早い段階に規模の大きな古墳が築かれたこと、これに対し周辺部では、それに遅れて古墳が築かれたために規模が縮小することになったとみてよいだろう。

4. 横穴式石室の変遷と年代観

最後に、横穴式石室の変遷について記した箇所の見直しを行なって、本稿のまとめとしたい。

北山背で横穴式石室が導入されるのは、須恵器の型式でいうTK10型式、年代にすると6世紀前葉から中葉にかけてにあたる⁽³⁶⁾。それが玄室長4.7mグループに属する片袖石室や物集女車塚古墳に該当することは先述のとおりである。しかし、それ以前にも北山背では横穴式石室が築かれている。それは岩倉盆地西端の丘陵上に築かれた本山神明1号墳と呼ばれるT字形石室⁽³⁷⁾をもつ古墳で、MT15型式に属する須恵器が出土していることから、6世紀前半に築造された古墳とみてよい⁽³⁸⁾。玄室がT字形を呈する特色ある石室は、その後北山背では築造されることがなかった。そのため、群集墳の展開という論旨には合致しないと考え、旧稿では除外したのであるが、近年亀岡市・八木町・園部町といった南丹波の各地で、出現期の横穴式石室が相次いで調査され、それらが広範囲に分布することが明らかとなった⁽³⁹⁾。それらの石室は、石室は正方形を呈する玄室に短い羨道が取り付く構造をもつもので、本山神明1号墳のT字形石室とも共通する点が多い。ただし本山神明1号墳の石室に関しては、岩倉盆地が滋賀県の湖西地方に接するという地理的な条件からみて、湖西地方に分布する正方形プランの石室などとの関連も想定されるべきであろう。

さて、北山背で築造が始まった片袖石室は、いずれもが首長墓かそれにつながる古墳の主体部に採用されたものであった。しかし、ここで採用された片袖石室がその後どう展開したかとなると、その変遷を石室構造の上から明確に提示し得ないのが実状である。一応、円山古墳、入道塚古墳・南天塚古墳・巽1号墳・御堂ヶ池1号墳など、嵯峨野の平野部に築かれた規模の大きい円墳の主体部に継続すると考えるのが自然なのであるが、出土した須恵器がTK10型式の後続型式と特定できない点に問題を残している。

続いて、6世紀末葉になって玄室長3.6mグループの石室が築造される。群集墳の主体部に横穴式石室が採用される最初の段階であり、このグループの石室からはTK209型式の須恵器が出土するため、上記の年代推定が可能である。3.6mグループの次世代の石室といえるものが、玄室長3.2mグループの石室である。このグループの石室をもつ古墳で構成された群集墳も多く、北山背で群集墳が最も盛行する段階でもある。また、この段階の横穴式石室は、まだ有袖石室が主流をなすが、使用石材が小型化することによって石室の規模は縮小し、袖石の出も減少して玄室と羨道の区別は不明確となる。また玄室では胴張り形態のものが増加するなど、石室本来の姿が徐々

に変化をとげる。こうした衰退化がみられるのも、この段階の特色である。

7世紀前半になると、石室の規模はますます縮小する。有袖石室では玄室長2.2mから2.9mの石室が築造されるが、玄室長によるまとまりは喪失する。むしろこの段階を特徴付けるのは、無袖石室が主流をなすことである。無袖石室は、有袖石室の羨道部をそのまま利用することから始まるが、空間は次第に狭まり、群集墳本来の複数埋葬は困難となっていく。

7世紀中葉になると、墳丘は方墳へと変化し、主体部には小型化した無袖石室と新たに出現した小石室で構成された古墳群が出現する。これが、「七世紀型古墳群」⁽⁴⁰⁾とも呼ばれる特徴ある古墳群である。主体部の無袖石室は、複数埋葬が不可能なまでに小型化し、小石室は無袖石室の羨道閉塞を固定したのものとして出現する。このような石室構造の変化は、埋葬形態が複次葬から単次葬に変化したことの証しであり、この段階で出現した古墳群が従来の群集墳とは性格を異にする古墳群であったことをものがたる。北山背の群集墳はこの段階で終焉を迎える。

以上、簡単にその見通しを示した。再度まとめると、T字形や正方形プランの特徴ある石室が出現する第1段階、片袖石室が導入される第2段階、両袖化した石室が普及し始める第3段階、群集墳に玄室長3.6mグループの石室が採用される第4段階、玄室長3.2mグループの石室が採用され、群集墳が最も盛行する第5段階、石室の小型化と無袖化が進行する第6段階、小型の無袖石室と小石室からなる終末期古墳群が築造される第7段階となる。旧稿ではこれを第1段階から第4段階に整理したが、本稿では以上の7段階に細分した。しかし、ここで述べた見通しはあくまでも横穴式石室の変化を基軸にしたものであって、出土遺物、特に須恵器との対応関係が明確に整理できていない点に大きな問題を残している。出土須恵器の年代観と横穴式石室の形態を整合させる作業は、横穴式石室の変化に年代観を与えるだけでなく、地域間の関係を整理する上でも不可欠な作業となるため、今後に残された大きな課題といえる。

5. おわりに

1989年に提示した旧稿の改訂を目的として、旧稿以降に調査された横穴式石室を紹介し、既往資料も加えて横穴式石室の問題点を検討をした。そして玄室長のまとまりを「グループ」として認識し、その意味するところを論じた。次いで、グループごとに細部を検討し、不一致な部分が多い結果から、共通の設計企画を想定するには無理があると考えた。しかし片袖石室における袖の方向や排水溝の有無、石棺・陶棺の利用形態においては乙訓に明確な地域的特色があることを指摘し、玄室床面積や無袖石室の規模からは旧葛野郡の優位性についても言及した。最後に、横穴式石室の変遷についても旧稿に手直しを加えた。以上によって、旧稿段階では不十分であった玄室長でのグループ認識、地域的特色の一端は明確にしたが、出土須恵器による年代観と横穴式石室の変遷を整合させる作業はほとんど手つかずで残った。北山背の群集墳研究が進展するには、こうした点の解明が不可欠であるため、今後機会をとらえて検討を加えたい。

謝辞 本稿を作成するにあたっては、以下の方々より御教示、御協力いただいたことを明記し、

丸川 義広

感謝の意を表します。(順不同・敬称略)

安藤信策(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、稲垣正宏(財団法人滋賀県文化財協会)、吹田直子(宇治市教育委員会)、中島皆夫(財団法人長岡京市埋蔵文化財センター)、加納敬二・木下保明・平田 泰・百瀬正恒(以上、当研究所)

註・参考文献

- (1) 丸川義広「横穴式石室平面形態の分析」『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- (2) 木下保明「巽古墳(UZ11)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- (3) 平田 泰「仁和寺院家跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- (4) 藤沢長治「京都大枝福西古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 1961年
- (5) 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—補遺編その2—』京都市都市開発局洛西開発室 1973年
- (6) 吉村正親「福西22号墳(90MK10)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年 調査古墳を22号墳とするが、前掲(5)では25号墳まで番号が付けられているので、古墳番号は若干混乱をきたしている。
- (7) 玉村登志夫「福西28号墳 No.68」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成4年度 京都市文化観光局 1993年
- (8) 加納敬二・他「南春日町遺跡第17・19次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年 石室平面図は、『下西代古墳群発掘調査現地説明会資料』1990/09/15(財)京都市埋蔵文化財研究所 を引用。
- (9) 加納敬二・他「南春日町遺跡第20・21次調査」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年 石室平面図については加納敬二氏より配慮をいただいた。
- (10) 「墳丘・石室の検討」『大枝山古墳群』前掲(1)に同じ。
- (11) 国下多美樹「長岡京跡左京第416次(7ANFNZ-7地区)～朱雀大路、法華寺古墳群、西小路遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集 向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター 1998年
- (12) 木下保明・他「灰方古墳群」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- (13) 杉井 健・福永伸哉・他『井ノ内稻荷塚古墳Ⅱ』長岡京市文化財調査報告書第37冊 長岡京市教育委員会 1997年
- (14) 山本輝雄「走田古墳群第1次・奥海印寺跡第3次(7CKPME-3地区)調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第36冊 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会 1997年
- (15) 『第6回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』 京都府埋蔵文化財研究会 1998年 P224を参照。
- (16) 「古墳時代」『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1990年 P313
- (17) 北田栄造・他『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年

- (18) 高橋 潔・他「中臣遺跡第70-2次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- (19) 「総山古墳」『京都市 東山・伏見地域分布調査報告書 1975年～1986年』 京都考古学研究会 1999年刊行予定
古墳に関しては稲垣正宏氏より御教示いただき、資料に関しては百瀬正恒氏より御配慮いただいた。
- (20) 小池 寛・荒川 史・他『京都府遺跡調査報告書—京滋バイパス関係遺跡—』第7冊 財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- (21) 『第4回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』 京都府埋蔵文化財研究会 1996年 P132を参照。古墳の細かなデータについては、宇治市教育委員会の吹田直子氏より御教示いただいた。
- (22) 安藤信策「大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1976 京都府教育委員会 1977年
- (23) 『嵯峨野の古墳時代』 京都大学考古学研究会 1971年 P41「墳丘上段に南向きに開口する横穴式石室がある。その構成は玄室側壁が2段から3段積みの巨石よりなり、また羨道部側壁は2段積みとなっている。天井石は玄室部に2枚、羨道部に5枚乗っている。この石室全長は14.7mと畿内屈指の長さを持つ。石室内には、玄室奥壁に並行して石棺の底石が遺存し、蓋石もその西方に取りのぞかれて置かれていたが、身の4枚の側石は発見できない。・(中略)・さらに玄室部入口寄りに奥壁に直角に石棺の底石が遺存しており、側石も同じ位置に存在する。・(中略)・また石棺は奥のものの方が新しい型式であることも注意される。」
- (24) 『見瀬丸山古墳と天皇陵』 季刊考古学 別冊2 雄山閣 1992年 石棺の配置が類似する点は特に注目される。
- (25) 『京都府遺跡地図』第4分冊 京都府教育委員会 1972年 などによる。
- (26) 「南野古墳群 調査9-14・21・61で、古墳の周溝と考えられる溝状遺構を検出した。道路端に石室と墳丘が一部残存しており、古墳の周溝を検出したものと考えられる。太秦堀池町に所在する。また、古墳時代に推定できる古墳の路面を数地点で確認した。嵯峨野に点在している古墳の多くが、この古道沿いに立地することを指摘できる。」 『京都嵯峨野の遺跡 —広域立会調査による遺跡調査報告—』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 P130による。
- (27) 広沢南野古墳群とこの常盤馬塚古墳は、大正から昭和初めの地図に墳丘が描かれる。『京都府遺跡地図』(前掲25)、『京都府遺跡目録』(京都府教育委員会 1962年 プリント)には、1954年に調査され須恵器の平瓶1と高杯1、土師器皿1が出土し、遺物は嵯峨野高校が所蔵とある。
- (28) 『嵯峨野の古墳時代』(前掲23) P9
- (29) 丸川義広「松尾山の群集墳 —松尾十三塚古墳群の紹介も含めて—」『研究紀要』第4号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- (30) 木村泰彦「長岡京跡右京第322次(7ANIOK-2地区)調査概要 —今里大塚古墳第2次調査—」『長岡京市文化財調査報告書』第22冊 長岡京市教育委員会 1989年
1988年の調査では、周溝の方向、前方部削平の痕跡という墳丘西側の形状、水田畦畔の地割りから前方後円墳の可能性が高いという見解が示され、全長80m程の規模が想定された。しかし、これだけ前の根拠で前方後円墳を想定するには不十分と筆者は考える。また前方後円墳とした場合でも横穴式石室の形態が新しいという点に問題が残る。報告では蛇塚古墳との類似性を根拠にあげられるが、その蛇塚古墳も周囲の地割りから前方後円墳と推定されたものである。筆者は、畿内の前方後円墳は6世紀

中葉を下限に終焉したと考えるので、蛇塚古墳自体も再検討が必要と考えている。

- (31) 天塚古墳の後円部中央には大きな盗掘窟が南東方向に穿たれており、この場所に本来の主体部ともいふべき横穴式石室が存在した可能性が高い。したがって、現在知られる2つの横穴式石室は付属的な埋葬施設とみるのが妥当で、それは2つの石室の規模、配置、無袖と片袖という形態からみても当然である。1墳丘3石室の前方後円墳としては、福知山市の牧正一古墳、滋賀県八日市市八幡神社46号墳が知られる。両古墳とも本来の主体部は両袖石室で後円部にあり、前方部に片袖石室、くびれ部に無袖石室が築かれる。天塚古墳も同様であったろう。

『牧正一古墳』福知山市文化財調査報告書第34集 福知山市教育委員会 1997年
兼康保明「滋賀県」『古代学研究』第104号 古代学研究会 1984年

- (32) 入道塚古墳の石室は、『京都府遺跡地図』（前掲25）や調査報告（前掲22）では玄室長4.6m、幅2.5mとするが、横穴式石室の企画を検討した『嵯峨野の古墳時代』（前掲23）の表11には玄室長4.0m、幅2.5mとするので、旧稿以来この値を採用してきた。この事情は円山古墳の場合も同じで、玄室長5.4m、幅3.2mとするのを玄室長4.9m、幅3.2mとした値を採用している。

- (33) 大枝山古墳群での4号墳と5号墳、22号墳と23号墳の関係などから指摘したものである。こうした2基1組の単位を小支群として認識した。群集墳を形成する最小単位である。「古墳群の構成と動向」『大枝山古墳群』（前掲1）のP56による。

- (34) 丸川義広「福西古墳群と大枝山古墳群 - 京都市の西郊に営まれた二つの群集墳について -」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会 1992年

- (35) 山背国における葛野の優位性については文献史料からも解釈される。上田正昭氏は『古事記』『日本書紀』にある乙訓の語源説話が、単に輿から墮ちたという意味の墮国ではなく、兄国としての葛野に対する弟国として、乙訓の語源があったとされた。この見解は、横穴式石室にみる旧葛野郡の優位性ともよく一致する。

上田正昭「序章 弟国と兄国」『向日市史』上巻 向日市 1983年 P6「兄媛に対して弟媛があるように、兄国に対する弟国と理解する説のほうがより蓋然性をもつ。その点で興味深いのは、『日本書紀』がとくに葛野の地域に弟国があったと伝えるなかみである。古く葛野の地域に弟国が含まれ、やがて葛野を兄国とし、乙訓の地域を弟国とよぶようになったのかもしれない。」

和田 萃氏からも同様の見解が示されている。和田 萃「兄国と弟国 - 内宮の相殿神をめぐって -」『古代の日本と東アジア』小学館 1991年

- (36) 須恵器の年代観については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年 による。

- (37) 多賀茂治「本山神明1号墳」『第38とれんち』京都大学考古学研究会 1986年

- (38) 大野嶺夫「岩橋千塚と周辺のT字形横穴式石室（上）（下）」『古代学研究』第109・110号 古代学研究会 1985・86年

- (39) 『横穴式石室のはじまり - 一口丹波を中心に -』第25回企画展展示図録 亀岡市文化資料館 1998年
亀岡市で北ノ庄13・14号墳、医王谷3号墳、八木町で小谷17号墳、園部町で小山3号墳、天神山2・3号墳などが調査されている。

- (40) 木下保明「『七世紀型古墳群』について」『考古学論集』第1集 考古学を学ぶ会 1985年

補記 横穴式石室の設計と尺度について

旧稿では、横穴式石室の玄室規模に一定のまとまりがあることの背景に尺度の存在を想定し、高麗尺（1尺35cm）と晋尺（1尺24cm）での蓋然性について検討を加えた。しかし、玄室長については完数値が得られやすい反面、幅などで合致しない点も多いため、使用の有無については断定を避けた。その後、和田晴吾氏より尺度の使用に関する考察が示され、そこには北山背の横穴式石室も例に上げられているので、本稿の論旨とも関連するため少し整理しておく。

和田氏は、畿内およびその周辺の大型石室の玄室長が1尺単位で秩序化されること、しかも京都盆地に築造された群集墳の横穴式石室もその影響下にあるとされ、高麗尺（1尺36cm）と唐尺（1尺30cm）の換算結果を表にして、石室の階層構造を示しておられる。しかし、玄室長3.6mグループ（高麗尺では10尺に該当）と玄室長3.2mグループ（高麗尺では9尺に該当）が時期差であることは3の②で指摘したことであって、玄室長をもって階層差とみるには無理がある。また尺度の使用が広範囲に及んだと評価されるが、これも3の③で同じ玄室長グループの細部を検討し、不一致点が多いことから、北山背の横穴式石室には全体を包括するような強い規制力をもった設計企画は存在しなかったという結論を得ている。このように、横穴式石室の規模や形態から使用尺度を割り出す作業には限界が多いため補記した次第である。

和田晴吾「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5 近畿I 角川書店 1992年 P338「すなわち、当時の畿内を中心とした地域にあっては、横穴式石室の平面は、その大小を問わず、あるいは集団差や工人差といった多少の形態差を問わず、特定の尺度を用いて設計され、1尺単位でもって秩序づけられていたと推測されるのである。」

表2 横穴式石室一覽

地域	番号	古墳名	形態	全長	玄室長 (a)	玄室幅 (b)	玄室高 (c)	羨道長 (d)	羨道幅 (e)	羨道高 (f)	玄室比 (b/a)	長比 (e/d)	幅比 (f/e)	高比 (f/e)	主軸 (真北)	旧番号・文献・備考	
嵯	1	蛇塚古墳	両袖	(18.0)	6.7	3.8	5.2	(11.3)	2.6	3.5	0.57	5.90	0.68	0.67	N41° W	1『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	2	双ヶ岡1号墳	両袖	(14.3)	6.25	3.5	5	(8.05)	2.4	2.3	0.56	0.78	0.69	0.46	N40° E	2『名勝双ヶ岡保存整備事業報告』昭和55年度	
	3	円山古墳	両袖	14.5	4.9	3.23	4.4	9.6	1.9	(2.4)	0.65	0.51	0.59			『埋蔵文化財発掘調査概報』1976	
	4	甲塚古墳	両袖	14.2	5.2	2.8	(3.5)	9	1.6	(1.8)	0.54	0.58	0.57		N01° W	3『嵯峨野の古墳時代』1971	
	5	入道塚古墳	両袖	11.9	4.0	2.5		7.3	1.6		0.63	0.55	0.64			『埋蔵文化財発掘調査概報』1976	
	6	天塚古墳(北)	無袖	(8.3)		2.2	(2.2)		1					0.45		N96° E	4『嵯峨野の古墳時代』1971年
	7	天塚古墳(南)	片袖左	7.7	4.7	1.8	2.1	3	1.25	1.55	0.38	1.57	0.69	0.74	N21° E	5『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	8	南天塚古墳	両袖	(8.35)	3.6	2.5	(2.35)	(4.75)	1.4	(1.3)	0.69	0.76	0.56		N12° W	6『埋蔵文化財発掘調査概報』1976	
	9	狐塚古墳	両袖	(12.8)	3.8	2.2	(2.2)	(9.0)	1.35	(1.3)	0.58	0.42	0.61		N32° W	7『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	10	広沢古墳	無袖?	12		2.3	2.1		1.9	1.3				0.62	N25° W	8『京都府文化財調査報告』第22冊1961	
	11	巽1号墳	両袖	(10.1)	4.6	2.5		(5.5)	1.7		0.54	0.84	0.68			『京都市内遺跡試掘調査概報』昭和61年度 図2の1	
	12	常盤御池古墳	片袖左	(8.5)	4.7	1.8		3.8	0.9		0.38	1.24	0.50			『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』 図2の2	
	13	常盤東ノ町2号墳	無袖	8		1.7	(0.45)		1.4						N35° W	9『常盤東ノ町古墳群』1977年	
	14	常盤東ノ町1号墳	無袖	7.6		1.5	(0.6)		1.9						N06° W	10『常盤東ノ町古墳群』1977年	
	15	御堂ヶ池1号墳	両袖	(8.3)	3.7	2.7	3.7	(4.6)	1.6	2.4	0.73	(0.80)	0.59	0.65	N41° W	11『御堂ヶ池1号墳発掘調査概報』昭和57年度	
野	16	御堂ヶ池21号墳	両袖	8.35	3.4	2.1	0.9	4.95	1.1	0.65	0.62	0.69	0.52	0.72	N113° E	12『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度	
	17	御堂ヶ池17号墳	片袖左	(6.8)	3.4	1.7	(1.4)	(3.4)	1.05	0.85	0.50	(1.0)	0.62		N14° W	13『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	18	御堂ヶ池13号墳	両袖	7.2	3.2	1.5	(1.3)	4	1	(1.4)	0.47	0.80	0.67		N62° W	14『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	19	御堂ヶ池14号墳	両袖	(5.8)	2.85	1.4	(2.2)	(2.95)	1	(1.5)	0.49	(0.97)	0.71		N32° W	15『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	20	御堂ヶ池6号墳	両袖	(3.2)	(2.95)	1.5	1.8				0.51				N25° W	16『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	21	御堂ヶ池11号墳	両袖	5	2.25	1.4	(1.0)	2.75	1	(0.9)	0.62	0.82	0.71			17『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	22	御堂ヶ池12号墳	無袖	4.7		1.2	(1.4)								N64° W	18『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	23	御堂ヶ池26号墳	無袖	3.35		1.1	(1.3)								N100° W	19『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度	
	24	御堂ヶ池20号墳	無袖	5.8		1	(1.3)								N109° E	20『御堂ヶ池群集墳第20号墳発掘調査報告』1973年	
	25	御堂ヶ池15号墳	無袖	4		0.9	(0.4)								N04° W	21『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	26	音戸山1号墳	両袖	(7.2)	3.1	1.8	(1.4)	4.1	1.2	(1.2)	0.58	0.76	0.67		N81° W	22『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和58年度	
	27	音戸山4号墳	片袖左	(7.5)	3.4	1.55	(0.4)	4.1	1.35	0.25	0.46	0.83	0.87		N29° W	23『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和58年度	
	28	音戸山5号墳	無袖	(5.6)		1.4	(1.1)		1				0.71		N30° W	24『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和58年度	
	29	音戸山3号墳	無袖	(6.1)		1.25	(0.7)		(1.05)					(0.84)	N24° W	25『音戸山古墳群発掘調査概報』昭和58年度	
	30	音戸山8号墳	無袖	5		1.15	0.35								N17° W	26『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度	
	31	音戸山西支群2号墳	無袖	5.5		1.3	1.7		0.7			0.54			N69° W	27『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度	
	32	音戸山西支群1号墳	無袖?	(1.1)		0.85	0.55									28『御堂ヶ池古墳群・音戸山古墳群発掘調査概報』昭和59年度	
大枝	33	大枝山22号墳	両袖	11.1	3.6	2.25	2.3	7.5	1.4	1.9	0.63	0.48	0.62	0.83	N06° E	29『大枝山古墳群』1989年	
	34	大枝山4号墳	両袖	11.25	3.6	2.1	3.15	7.65	1.45	2.15	0.58	0.47	0.69	0.68	N00° W	30『大枝山古墳群』1989年	
	35	大枝山15号墳	両袖	(9.7)	3.7	2	(3.0)	(6.0)	1.2	(2.1)	0.54	(0.62)	0.60		N35° E	31『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	36	大枝山20号墳	両袖	(6.15)	3.65	2.2	(2.6)	(2.5)	(1.0)	(1.6)	0.60	(1.46)	0.45		N24° W	32『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	37	大枝山11号墳	両袖	(5.6)	(3.6)	(2.0)	(1.0)	(2.0)	(1.1)	(0.5)	0.56	1.80	0.55		N11° E	33『大枝山古墳群』1989年	
	38	大枝山21号墳	両袖	10.15	3.6	1.7	2.6	6.55	1.1	2	0.47	0.55	0.65	0.77	N24° W	34『大枝山古墳群』1989年	
	39	大枝山23号墳	両袖	(8.5)	3.1	1.8	(2.15)	5.4	1.25	(1.15)	0.58	0.57	0.69		N13° E	35『大枝山古墳群』1989年	
	40	大枝山25号墳	両袖	9.9	3.1	2	(0.8)	6.8	1.3	(2.1)	0.65	0.46	0.65		N43° W	36『大枝山古墳群』1989年	
	41	大枝山18号墳	両袖	(5.8)	3.2	1.7	(2.2)	(2.6)	1.2	(1.35)	0.53	(1.23)	0.71	(0.61)	N32° W	37『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	42	大枝山14号墳	片袖左	8.65	3.1	1.55	2.3	5.55	1.05	1.8	0.50	0.56	0.68		N23° E	38『大枝山古墳群』1989年	
	43	大枝山5号墳	片袖右	6.4	2.4	1.4	(1.5)	4	1	(1.3)	0.58	0.60	0.71		N08° E	39『大枝山古墳群』1989年	
	44	大枝山26号墳	無袖?	(3.35)		1.35	0.75								N04° E	40『大枝山古墳群』1989年	
	45	北松尾1号墳	無袖	(3.9)		1.4	(2.0)								N39° W	42『嵯峨野の古墳時代』1971年	

横穴式石室平面形態の検討 補稿

地域	番号	古墳名	形態	全長	玄室長 (a)	玄室幅 (b)	玄室高 (c)	羨道長 (d)	羨道幅 (e)	羨道高 (f)	玄室比 (b/a)	長比 (e/d)	幅比 (e/b)	高比 (f/c)	主軸 (真北)	旧稿番号・文献・備考	
大	46	北松尾4号墳	無袖	(4.6)		1.35	1.85								N21° W	43『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	47	北松尾2号墳	無袖	(2.35)		1.25	(1.5)								N23° W	41『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	48	北松尾3号墳	無袖	(4.3)		1.1	(1.6)								N26° W	44『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	49	ボウジョウ1号墳	両袖	(10.8)	3.6	2.3	3.7	(7.2)	1.15	2.3	0.64	(0.50)	0.50	0.62	N56° W	45『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	50	ボウジョウ3号墳	両袖	6.25	3.15	1.9	(2.6)	(3.1)	(1.1)	(1.5)	(0.60)	(1.02)	(0.58)		N29° W	46『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	51	ボウジョウ2号墳	両袖	(5.7)	2.6	1.5	(2.2)	(3.1)	0.9	(1.5)	0.58	(0.84)	0.60		N66° W	47『嵯峨野の古墳時代』1971年	
乙	52	衣笠山1号墳	両袖	(6.0)	3.2	2.2	(2.2)	(2.28)	1.4	(1.8)	0.69	(1.14)	0.64		N89° E	48『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	53	福西4号墳	両袖	(10.2)	4.5	2	(2.2)	(5.7)	1.2	(2.3)	0.44	(0.79)	0.60		N05° W	49『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』1970年	
	54	福西(22)号墳	両袖?	(5.6)	(1)	1.3	(1.2)	(4.6)	1.05	(0.6)			0.81		N12° W	『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度 図2の6	
	55	福西28号墳	片袖石	(5.5)	(3.0)	1.2	(0.45)	(2.5)	0.9	(0.2)	(0.4)	(1.2)	0.75				『京都市内遺跡試掘調査概報』平成4年度 図2の7
	56	福西10号墳	無袖	(6.9)		1.45	(1.1)		1.65			1.14			N30° W	50『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』1972年	
	57	福西古墳	無袖?	(3.2)		1.2	(1.0)										『京都府文化財調査報告書』第22冊 図2の3
	58	福西23号墳	無袖?	(2.3)		1	(0.2)		0.85			0.85			N27° E	『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査補遺編その2』1973年 図2の4	
	59	福西24号墳	小石室?	1.85		0.5	0.45								N80° E	『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査補遺編その2』1973年 図2の5	
	60	下西代2号墳	両袖	9.5	3.8	1.7	(1.1)	8.2	1	(0.8)	0.45	0.46	0.59		N28° W	玄室内に小石室様の石棺、長2.6m、幅0.5m、高さ0.5m『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』図2の9	
	61	下西代1号墳	両袖	7.5	3	1.5	(0.9)	3.7	1.1	(0.9)	0.50	0.81	0.73		N00° WE	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』図2の8	
	62	長壘塚古墳	両袖	(5.0)	(3.35)	(1.35)	(1.7)	(1.45)	(0.95)	(0.7)	(0.38)	(2.45)	(0.70)		N14° E	55『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	63	八幡宮古墳	片袖?	(4.1)	(2.85)	(1.6)	(1.4)	(1.25)	(0.95)	(0.9)	(0.56)	(2.28)	(0.59)		N32° W	56『嵯峨野の古墳時代』1971年	
	64	灰方1号墳	無袖?	(1.5)		1.1	(0.55)										『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』図2の11
	65	灰方4号墳	無袖?	(4.0)		1.1	(0.9)										『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』図2の12
	66	物集女車塚古墳(向日)	片袖石	(11.8)	5.1	2.7	3	6.7	1.4	1.6	0.53	0.76	0.52	0.53	N30° W	52『物集女車塚 向日市埋蔵文化財調査報告書』第23集 1988年	
	67	法華寺1号墳(向日)	無袖	(2.2)		0.5	0.2								N46° W	『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集 1998年 図2の10	
	68	井ノ内稲荷塚古墳(長岡)	片袖石	10.2	4.7	2.2	(1.7)	5.5	1.2	(1.15)	0.47	(0.85)	0.55				『井ノ内稲荷塚古墳II』1997年 図2の13
	69	カラネガ1号墳(長岡)	両袖	8.6	3.2	1.2	2.1	5.4	1	1.5	0.38	0.59	0.83	0.71	N79° W	51『史林』64-3 1981年	
	70	大原1号墳(長岡)	片袖左	(3.0)	1.8	1.5	(0.9)	(1.2)	1.35	(0.3)	0.83	0.90	0.90		N23° W	53『奥海印寺大原古墳群調査報告書』1973年	
	71	大原2号墳(長岡)	無袖	(4.2)		1.1	(0.6)								N29° E	54『奥海印寺大原古墳群調査報告書』1973年	
	72	走田9号墳(長岡)	両袖	(5.4)	3.2	1.8	(2.3)	(2.2)	1.5	(0.9)	0.56	(1.45)	0.83		N05° W	『長岡京文化財調査報告書』第35冊 1996年 図2の15	
	73	走田10号墳(長岡)	両袖?	(4.3)		1.5				(0.9)					N15° W	『長岡京文化財調査報告書』第38冊 1998年 図2の16	
74	走田8号墳(長岡)	無袖?	(1.3)		1	(0.3)								N08° E	『長岡京文化財調査報告書』第35冊 1996年 図2の14		
75	今里大塚古墳(長岡)	両袖	10	(5.0)	(2.8)	(3.0)	(5.0)	(1.5)	(3.5)	(0.56)	(1.0)	(0.54)		N48° W	『長岡京市史資料編1』1990年 図2の17		
岩倉	76	本山神明1号墳	丁字形	3.75	1.6	3.3	(1.2)	2.15	1	(1.0)	2.06	0.74	0.30			『第38とれんち』1986年	
山	77	醍醐1号墳(第1)	両袖	7.5	(3.7)	1.7	(0.3)	(3.8)		(1.0)	0.46	0.97			N20° E	『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和61年度 図2の18	
	78	醍醐11号墳	両袖	(5.0)	2.5	1.5	(0.5)	(2.5)	1.3	(0.7)	0.60	1.00	0.87		N30° E	57『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度	
	79	醍醐10号墳	片袖石	(3.7)	2.45	1.3	0.75	1.25	1.07	0.55	0.53	1.96	0.82		N13° E	58『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度	
	80	醍醐12号墳	無袖	(2.7)		1.3	0.85								N01° W	59『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度	
	81	醍醐17号墳	無袖	(3.5)		1.4	(0.35)								N01° E	60『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度	
	82	醍醐14号墳	無袖	(3.9)		1.2	1.0		1				0.83		N14° E	61『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和61年度	
83	醍醐13号墳	無袖	(3.75)		1	(1.2)								N15° W	62『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度		

地域	番号	古墳名	形態	全長	玄室長 (a)	玄室幅 (b)	玄室高 (c)	羨道長 (d)	羨道幅 (e)	羨道高 (f)	玄室比 (b/a)	長比 (a/d)	幅比 (e/b)	高比 (f/c)	主軸 (真北)	旧稿番号・文献・備考
山	84	醍醐1号墳(第2)	無袖	3.5		1.1	1.6								N149° E	63【醍醐1号墳発掘調査概報】昭和61年度
	85	醍醐8号墳	無袖	(3.5)		0.9	(1.2)		0.7				0.78		N33° E	64【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	86	醍醐9号墳	無袖	4.9		0.8	1		0.9				1.13		N06° E	65【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	87	醍醐20号墳	無袖	2.4		0.7	(0.7)								N01° E	66【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	88	醍醐2号墳	小石室	2.2		0.65	(0.7)								N01° E	67【醍醐古墳群】昭和54年度
	89	醍醐16号墳	小石室	2.05		0.4	(0.7)								N11° E	68【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	90	醍醐3号墳	小石室	1.7		0.5	(0.6)								N02° W	69【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	91	醍醐15号墳	小石室	(1.1)		0.3	(0.3)								N26° W	70【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	92	醍醐18号墳	小石室	0.95		0.35	(0.5)								N04° E	71【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	93	醍醐19号墳	小石室	(0.6)		1.25	(0.4)								N36° E	72【醍醐古墳群発掘調査概報】昭和60年度
	94	旭山E-2号墳	両袖	(6.0)	2.4	1.2	(0.4)	3.6	0.9	0.4	0.50	0.67	0.75		N22° W	73【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	95	旭山E-9号墳	無袖	(3.9)		0.8	0.85		0.6				0.75		N00° W	74【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	96	旭山E-10号墳	無袖	3.6		0.8	0.95								N06° W	75【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	97	旭山E-7号墳	無袖	2.9		0.7	0.65		0.85				1.21		N03° W	76【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	98	旭山D-4号墳	無袖	3.45		0.7	(0.9)		0.95				1.36		N13° W	77【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	99	旭山C-3号墳	無袖	(3.4)		0.7	(0.7)								N22° W	78【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	100	旭山C-5号墳	無袖	(3.8)		0.75	(0.9)								N10° W	79【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	101	旭山E-4号墳	無袖	(2.7)		0.7	0.75								N22° W	80【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	102	旭山D-3号墳	無袖	(2.4)		0.65	(0.6)								N30° W	81【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	103	旭山E-1号墳	無袖	(2.1)		0.75	(0.25)								N19° W	82【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
	104	旭山E-8号墳	小石室	1.55		0.5	(0.4)								N01° W	83【旭山古墳群発掘調査報告】1981年
105	旭山D-2号墳	小石室	1.55		0.55	(0.6)								N08° W	84【旭山古墳群発掘調査報告】1981年	
106	旭山E-6号墳	小石室	1.28		0.55	(0.4)								N10° W	85【旭山古墳群発掘調査報告】1981年	
107	旭山E-3号墳	小石室	0.9		0.4	(0.3)								N16° W	86【旭山古墳群発掘調査報告】1981年	
108	中臣59次古墳	両袖	(5.1)	2.7	1.4		(2.4)	0.9		0.52	(1.13)	0.64		N31° W	87【中臣遺跡発掘調査概報】昭和59年度	
109	中臣70-2次古墳	片袖右	(6.3)	3.5	1.7	(0.5)	(2.5)	1.1	1	0.49	1.40	0.65		N04° W	【昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要】 図2の19	
110	中臣1次古墳	小石室	(2.4)		0.75	(0.2)								N29° W	88【中臣遺跡】1973年(プリント)	
111	大宅古墳	両袖	4.36	3.3	1.35		(1.06)	0.9		0.41	3.11	0.67			【名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告】1969年	
東山	112	本多山泉山2号墳	無袖?	(1.1)		0.8	(1.1)									89【京都市内遺跡試掘立会調査概報】昭和59年度
宇治	113	総山古墳	両袖	(3.8)	2.2	1.2	1.8	1.6	0.9	(1.1)	0.55	1.38	0.75		N21° W	【京都市東山・伏見地域分布調査報告書】1999年 図2の20
	114	集上り1号墳(宇治)	両袖	(8.4)	4.5	1.6	(1.1)	(3.9)	1.35		0.36	(1.15)	0.84		N30° E	【京都府遺跡調査報告書】第7冊1987年 図2の21
	115	集上り2号墳(宇治)	片袖右	(9.15)	3.65	1.9	(1.1)	(5.5)	1.5	(1.1)	0.52	(0.66)	0.79		N36° E	【京都府遺跡調査報告書】第7冊1987年 図2の22
	116	集上り3号墳(宇治)	片袖右	(4.65)	3.1	1.4	(1.1)	(1.55)	0.95	(0.8)	0.45	(2.0)	0.68		N02° E	【京都府遺跡調査報告書】第7冊1987年 図2の23
	117	菟道1号墳(宇治)	片袖右	(6.8)	3.3	1.2	(0.7)	3.5	0.95	(0.4)	0.36	0.94	0.79		N05° W	【第4回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集】1996年 図2の24
	118	菟道2号墳(宇治)	片袖右	(5.2)	(3.1)	1.2	(0.3)	2.1	1	(0.3)			0.83		N05° E	【第4回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集】1996年 図2の25
	119	菟道3号墳(宇治)	不明	(5.0)			(0.4)		1						N04° W	【第4回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集】1996年 図2の26

※ゴシック体は既調査古墳、単位はm、()は現状値